

第1章 なぜ、子ども食堂は社会的インパクトを与えたのか —「子ども」イメージの崩壊と「食」を通じた居場所づくりの可能性—

七星 純子

NANAHOSHI Junko

1 はじめに

「食卓を囲む」—これらのフレーズから、私たちがイメージするものはなんだろう。もちろん、人それぞれではあるだろうが、そこに「家族」がいることをイメージする人は多いのではないだろうか。また、そこには「子ども」もいるかもしれない。実際に自分の経験からイメージするかもしれないし、「サザエさん」のようなアニメや映画などからイメージするかもしれない。あたたかい料理を親子で囲む、「家族こそいつも食をともにする場であると私たちは信じてきた」（品田 2015 : 12）。

この「食」をめぐり、昨今「子ども食堂」という活動が広がりを見せている。「子ども食堂」とは、その名づけ親によると「こどもが一人で安心して来られる無料または低額の食堂」（湯浅 2016a : 5）であり、2012年にこの呼び名で活動が開始された。朝日新聞によると2013年までに開設された子ども食堂は21か所であったが、2016年5月には319か所となった⁽¹⁾。現在、子ども食堂の数を把握しているデータはないが、それ以降も各地で子ども食堂が立ち上がっており、ますます広がりをみせていることは間違いない⁽²⁾。

なぜ、これほどまでにこの活動に関心が高まったのだろうか。精力的に子ども食堂の活動を発信している湯浅誠は「「こども」「食」という“必殺アイテム”を並べたこの簡潔なネーミングが、誰のために何をするかをこれ以上ない形で明確に表わす。こども食堂の広がりには、このネーミングを抜きに語れない」（湯浅 2016a : 5）と言っている。たしかに、子ども食堂という名前は、「子ども」のために「食事を」ということが端的にイメージできる。子ども食堂自体は、それぞれの運営者によってさまざまなタイプがある。たとえば、学習支援を伴っていたり、対象を限定していたり、子どもに限らない多世代型であったり、多様な運営の仕方があるが「子ども」と「食」が共通要素になっている⁽³⁾。

では、私たちにとって「子ども」と「食」は、なぜ「必殺アイテム」になるのだろうか。この2つの要素と全国的な活動の広がりにはどのような関係があるのだろうか。私たちは子ども食堂を通し、どのような問題を射程に置いているのだろうか。本稿では、このような疑問を軸に置きながら、子ども食堂がなぜ広がっていったのかについて、活動のあゆみや先行研究、インタビュー調査から考察し、この活動がどのような問題に通じているのか論点の整理を試みたい。

2 子ども食堂の広がりについて

ここでは、先行研究にみる子ども食堂の特性や類型、活動のあゆみ、活動が広がる背景について整理を行っていききたい。

2.1 子ども食堂の特性と類型

子ども食堂が始まった5年後の2017年に、11団体の子ども食堂が掲載されている活動ガイドブックが発行されている(『広がれ、子ども食堂の輪!活動ガイドブック』)。そこでは、子ども食堂の活動の特性を①多様性、②創意性、③地域性にあると言っている。①多様性は、どれとして同じ子ども食堂はないことがあげられている。地域の子どもの様子に気付いて子ども食堂の活動を始めた所もあれば、子どもの居場所として立ち上がった所、冒険遊び場、児童館、学習支援グループ、社会福祉施設など、もともと子ども支援に関わっていた所が子ども食堂を開催するなど拠点や形態もさまざまであること、②創意性は、資金が不十分な中で活動者が創意工夫している点を、③地域性では、立ち上げやすい活動であり、地域の人々の参加や協力で始めることもでき「地域発の居場所」になっていることをあげている(山崎 2016: 8-9)。また、吉田祐一郎は子ども食堂の機能として「食を通じた支援」「居場所」「情緒的交流」の3つをあげている(吉田 2016)。

実際の子ども食堂の活動は前述の多様性という特性があるように、開催頻度も月に1度から週に1度、週に数回などと異なり、拠点も公民館や現在ある施設、自治会館などさまざまである。また運営者も有志や個人、NPO法人などで、どのような人を対象にしているかについて活動者によって多様である。

子ども食堂の活動理念から類型化を図った湯浅は、多くの子ども食堂の運営は大きくは2つのタイプに分けられると言っている。①ターゲット非限定・地域づくりの「共生食堂」で、子どもに限らずあらゆる人を対象にした地域づくりを目的にした場、②ターゲット限定・ケースワーク型の「ケア付き食堂」で、たとえば貧困家庭など困難を抱えた子どもを対象にし「食」を通じて作られる信頼関係を基礎にして課題への対応を行う場の2つである(湯浅 2016b)。

子ども食堂第1号である「気まぐれ八百屋・だんだん」は、対象の限定をせず、子どもも大人も来られる場としているため「共生食堂」であり、子ども食堂のルーツは「共生食堂」にあることになる(阿比留 2017)。これらは、はっきりとした区分というよりは、どちらかに重心があるか、または補い合うような関係でもであるとされている。

また、子ども食堂という名前がつく前から、地域の子どものために食事を提供する活動があった。吉田は、子ども食堂に通ずる従前の活動のひとつとして、地域の子どもの誰でも利用できる居場所であり、子どもに食事提供もしていた大阪市の「こどもの里」をあげている(吉田 2016)⁽⁴⁾。子どもに食事提供をする活動はこれまでもあったが、「子ども食堂」というネーミングにより、さらに地域の子どもの食事提供をする活動に注目が集まったこ

とが分かる。どのようにして子ども食堂は全国的に広がっていったのだろうか。

2.2 子ども食堂のあゆみ

子ども食堂は、前述したように急速な広がりを見せている。和田悠は、子ども食堂の開設時期で世代区分をしている。

第一世代：2012年「気まぐれ八百屋・だんだん」の子ども食堂

2013年「要町あさやけこども食堂」

第二世代：2015年頃から開設された子ども食堂（和田 2016：79）

そして、和田はひとつの潮目として2016年に開催された「子ども食堂サミット2016」をあげている。2015年4月に首都圏の7つの子ども食堂によって結成された「こども食堂ネットワーク」が中心になり「子ども食堂を社会的ムーブメントにすることを意識的に追及」（和田 2016：80）し始めた時期になる⁽⁵⁾。「こども食堂ネットワーク」のHPには、2018年3月現在248ヶ所の団体が掲載されており、全国の子ども食堂のネットワーク化やこども食堂のつくり方講座も開催し、各地の子ども食堂の広がりを後押ししてきた（和田 2016, 「こども食堂ネットワーク」HP）。

さらに、2016年9月28日には「「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー」のキックオフイベントが都内で開催された。この全国ツアーは、全国ツアー実行委員会を中心に各地で何かをするのではなく、各県の人々が主体となり、それぞれの地域で、子どもの置かれている状況や子ども食堂の役割、この活動にどのような関わりが可能なのかなどについて、講演会やシンポジウムを通して考える機会となっている。そして「一部の人たちの取り組み」から「地域住民の誰もが理解し関わっていける取り組み」へと広がっていき、地域から困っている子どもたちが一人でも減ることを願って進められている（「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー公式パンフレット2016）。

全国ツアー実行委員会は、子ども食堂の実践者のみならず、高齢者向けの食事サービスを含む中間支援組織や、民間団体、全国社会福祉協議会、大学職員などに所属している個人が務めている。相談役として、こども食堂ネットワークや東京ボランティア・市民活動センター、全国フードバンク推進協議会、全国子どもの貧困・教育支援団体協議会等の代表者たちが名を連ね、内閣府、厚生労働省、文部科学省、農林水産省、全国社会福祉協議会、全国民生委員児童委員連合会、子どもの貧困対策推進議員連盟、共同通信が後援をしている（「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー公式パンフレット2016）。

さらに、子ども食堂の取り組みが地域に定着し、活性化することを目的に「広がれ、こども食堂の輪！」推進委員会が設置されている。そこには、子ども食堂関係者以外に、児童館、プレーパーク、民生委員・児童委員、社会福祉協議会、スクールソーシャルワーカー、

福祉施設などが参加しており、活動を広げる上での課題や支援の方針について検討している（「広がれ、子ども食堂の輪！」全国ツアー実行委委員会テキストプロジェクト 2017:62）。

この全国ツアーは、前述の和田の言葉を借りるならば、子ども食堂活動者だけにとどまらず、「子ども」関連や「食」関連という 2 つの間口を通してアウトリーチを広げながら、子ども食堂の社会的ムーブメントを推し進めている。また、地域ごとにネットワーク化も進んできている。県レベル、市区町村レベルで、人がつながり、情報共有や食材の調達、地域の子どもの食堂のマップづくりなど、地域の人たちがつながり、それぞれの地域に合わせて子ども食堂活動を広げ、子どもの問題に取り組む動きが広がっている⁽⁶⁾。

2.3 先行研究にみる子ども食堂の広がりの背景

では、なぜここまで子ども食堂にさまざまな立場の人が注目し、子ども食堂活動は広がったのだろうか。前述したように、子ども食堂は急速に増加している。また、2012 年から 2016 年まで大手新聞五紙の子ども食堂に関する記事数を調査した吉田によると、2015 年以降、特に紹介記事が増え、当初は関東周辺や大阪などの限られた拠点についての複数の記事であったが、2015 年頃から他地域や取り上げられる拠点の数も増えているという（吉田 2016）。子ども食堂の数の増加とともに、報道も多くなり、活動への注目の高さがうかがえる。

子ども食堂にまつわる話として外せないことのひとつに「子どもの貧困」への注目があがる。2013 年には「子どもの貧困対策の推進に関する法律」（以下、子どもの貧困対策法）が成立し、子どもの貧困という問題が社会の注目を集めるきっかけになった（相澤 2016:10）。6 人に 1 人の子どもが相対的貧困⁽⁷⁾にあるという報道は衝撃を与え、ご飯を食べることもままならない子どもがいることも見えてくるようになってきた。

こうした子ども食堂の広がった背景を室田信一も①「子どもの貧困対策法」により、子どもへの働きかけを意識するようになったことをあげているが、そのほかに、②共働きやひとり親世帯の増加に伴う子どもの孤立や孤食の実態が見えてきたこと、③ネーミングがよく、取り組みやすい活動であること、④「子ども食堂ネットワーク」による活動が広がる環境づくりが進み、⑤④を受けて、自治体、民間の助成等の支援や法改正により子どもの居場所づくりに取り組む社会福祉法人の増加により子ども食堂の増加を後押ししたことをあげている。室田は、これら 5 つに加えて食事が生み出す力も活動の広がりを進める上で重要な要素であると言っている。さらにこの活動は、食支援、子ども支援、地域支援という側面もあり、現在の活動の広がりは「類を見ないもの」で「市民活動がもつ力強さを映し出している」（室田 2017:31）と評価し、日本の市民活動全体の成長の好機として捉えることを期待している（室田 2017）。

また、阿比留久美は「①子どもにとっての「食」の重要性は誰にとっても非常に理解しやすく、共感をえやすいもの」で、「②たいていの人は毎日食事をつくっていて、「特別」

なスキルをもたなくても食事づくりはできるため、地域でなにかをしたいと考えていた人にとってとっつきやすい活動」(阿比留 2017 : 27)であったと、共感しやすく、活動を始めやすい点を子ども食堂が続々と誕生した理由としてあげている。

子ども食堂の広がり背景の一つとされている「子どもの貧困」は、子どもに欠食や孤食状況を生み出す要因の 1 つとも言える。吉田は、子どもの貧困対策は国民運動として展開することを求められていて、その解決に向けて「国の進める子どもの貧困対策のみならず、民間の支援の動きのひとつとして、現在の子ども食堂の取り組みがある」(吉田 2016 : 360)と言っている。一方で、「貧困は社会問題であり、その解決のために政治こそが責任」(和田 2016 : 81)を取るべき問題で、子ども食堂は民間の自主的な小集団等であるから、行政の役割を肩代わりするべきものではないという指摘もある。

それでは、子ども食堂は、子どもや地域にとってどのような場所なのだろうか。初期から子ども食堂の活動に精力的に取り組んできた NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークが出版した本は『子ども食堂をつくろう！人がつながる地域の居場所づくり』というタイトルでもあり、子ども食堂を「居場所」と捉えている。また「地域の住民が始めた子ども食堂は、大人も懐かしさや温かさを感じる居場所になっています」(栗林 2016 : 4)と子どもだけではなく、大人にとっても「居場所」と捉えていることが分かる。子ども食堂は、子どもにとって「安全な居場所」であり「孤立への対策」であり、また活動者にとっても「居場所」にもなっている(室田 2016)。和田は子ども食堂の本質は、地域に「友人関係」をつくれる試みで「社会的孤立(関係の貧困)に対する市民社会における自主的、創造的な対応」(和田 2016 : 82)として評価している。

このように、子ども食堂は、「子どもの貧困」への関心が活動の広がりを推し進めたが、直接的な貧困対策というよりは、地域のつながりが弱くなっている現在、子どもにとっても、そこに関わる大人たちにとっても「居場所」になりえて、そのような場を地域に広げていくという市民活動の側面で分析をされてきている。

しかし、「子どもの貧困」への関心がなくなり「居場所」への関心に移ったということではないだろう。困難を抱える子どもなど対象を限定的にして活動している所もあるし、そのような子どもも含めて他の子どもや大人も来られるような対象を非限定的にしている所もある。どちらも、子どもが置かれている状況への関心を持ちつつ、子ども食堂にやってくる人たちにとって「居場所」として機能していると言えるだろう。

地域の子どもたちに食事を提供する一料理という手慣れた人には特別なスキルがなくても始められる活動であり、これまで地域活動に縁がなかった人たちも活動を始めている。既存の地域活動との連携や子どもの問題をきっかけに専門職と連携するなど、地域の課題解決に向けての人材育成や地域づくりの活性化の可能性も見えてくる。

しかし、子ども食堂は、なぜ類を見ないほどの活動の広がりを推し進めてきたのだろうか。これまで似たような活動がなかったわけではないのに、「子ども食堂」に魅了された理

由はどこにあるのだろうか。「子どもの貧困」や孤立、孤食の状況にある子どもたちに、私たちはなぜ引き寄せられたのだろうか。次節以降、子ども食堂関係者のインタビューにヒントを得ながら考えていきたい。

3 「子ども」「家庭」イメージの崩壊と子ども食堂

ここまで、子ども食堂の活動のあゆみや先行研究から子ども食堂の広がりについて見てきた。「子どもの貧困」への関心をひとつのきっかけに始まった子ども食堂の活動は、取り組みやすい活動であり、また活動をバックアップするネットワークやムーブメント、助成制度などもでき、既存の子ども関連や食関連の活動ともつながりも作りながら活動を推し進めていったことを概観した。また、活動のタイプを、対象の限定／非限定などで分けることもできるが、どのタイプも子どもの状況に関心をもちつつ、子ども食堂に来る人たちの地域の居場所として機能してきている。

ここでは、子ども食堂活動実践者らのインタビューから、子ども食堂がなぜ広がったのかについて考えていきたい。

3.1 インタビュー調査の概要

インタビュー調査は、研究の目的、インタビューの方法、データと個人情報の取り扱い、研究成果公表方法について説明を行い、同意書に署名をしてもらい半構造化面接で行った。1回のインタビューは1～2時間程度で必要に応じて2回実施した。同意を得てICレコーダでの録音下で行い「子ども食堂活動に関わる経緯」「子ども食堂や食を通じた活動を通して、どのような社会構想があるか」等について尋ねた。

インタビュー期間：2017年4～7月。

インタビュー対象者：Aさん：子ども食堂実践者。

Bさん：地域の子ども食堂関連のネットワークの代表者。

Cさん：高齢者を含む食事支援に関わる中間支援者。

3.2 「子ども」のイメージの崩壊

繰り返しになるが、子ども食堂が広がった背景のひとつに「子どもの貧困」への関心をあげることには異論はないだろう。2008年ごろから「子どもの貧困」への関心が高まり、2013年には「子どもの貧困対策法」が打ち出された。Aさんは、活動のきっかけをこのように話している。

「学校給食以外の食事を、晩ごはん朝ごはんバナナ一本だったりする子がいるというのを聞いたのがきっかけですね。」(Aさん)

小学校の先生から聞いたある子どもの様子が語られている。バナナ一本で過ごす理由が、

経済的な理由にあるかは定かではないが、この小学生の姿を想像するとやりきれない気持ちになることは想像に難くない。「子どもの貧困」は、彼らのその後の人生の選択までを狭めることも報道されるようになってきたが、「給食がない夏休み明けに痩せている子ども」の存在も明らかにされ、人生の選択どころか、命を育み、紡いでいくために必要な「食」という、人間にとって欠かせない営みがままたらいことが明らかになった。「子どもの貧困」という問題に関心があるかないかに関わらず、子どもの十分とは言えない「食」の状況に胸を痛めた活動者たちの思いが見えてくる。

2005年に食育基本法が定められ、「食育」という言葉をよく耳にするようになり、「食」への関心は高まっているように見える。しかし、バランスのよい食事をとることや、食文化の伝承が推奨される中、「食」の本来の機能である栄養をとり、生命を維持させることさえ危ぶまれている子どもが日本いた—この事実はなぜ人々をひきつけたのだろうか。

そもそも私たちは「子ども」にどのようなイメージを持っているのだろうか。戦前期から現代までの「子ども」の語られ方を分析した元森絵里子によると「敗戦によって、過去を否定し未来に希望が見出される中で、「子ども」とその教育は、理想の社会を実現する鍵」（元森 2009：228）と見なされる。そして「「子ども」は、それを語ることが、教育の成功とそれによる社会の実現を語ることになるようなものであった」（元森 2009：229）とされており、「子ども」は教育の観点から語られ、そして理想の社会を背負っている。

阿部彩も、これまで子どもに関する社会問題は、受験戦争やゲーム等への没頭など「子どもが属する家庭の経済問題とは別のところで論じられてきた」（阿部 2008：i - ii）と言っている。その背景として、日本は総中流社会であり「日本の大多数の子どもは「貧困」などから遠い位置にあると多くの人が信じて来たのではないか。そして、多少の差はあるものの、すべての子どもがそれ相応の教育を受け、能力と意欲があれば、世の中で成功することができるのだ、と」（阿部 2008：ii）という考えがあったという。

2008年頃から「子どもの貧困」が注目され始めたと言われているが、それ以前に貧困や子ども間の格差がなかったわけではない（相澤 2016）。しかし、1950～1970年代に「不平等な「現実」を自明に引き受ける世界と、「子ども」という「理想」を語る世界との併存の時代から、大人も子ども自身も「子ども」を一つの固定的なイメージを持って語り、貧困のような多様な「現実」が不可視化されていく時代への変化」（元森 2016：158-159）があった。このように、「子ども」の問題は教育や学校の問題として語られ、経済状況とともに語られることはなく、以前からあった「子どもの貧困」は不可視化され、私たちは総中流社会像を維持してきた。

しかし、21世紀に入り「子ども」が厳しい経済状況とともに語られ、私たちは、これまで想定していた「子ども」のイメージが崩れてきていることを目の当たりにしたのではないか。

Cさんは、これまで多くの子ども食堂に足を運ぶ過程で「子ども」について次のように語

っている。

「子どもという前提が、みなさん言ってることが違うんだなと。(中略)全然違うことを指して言ってる。なんとなくの、イメージなんだよ、それぞれの。たとえば、貧困の、たとえばだよ、わかりやすく貧困の小学生だとか、貧困の母子家庭だとか、で、それは見たものじゃなくて、ステレオタイプのイメージなんだよ、各人の」(Cさん)

子ども食堂がどのような人を対象にしているかは主催者により異なる。子ども食堂にやってくる子どもの年齢は各食堂で異なる。乳幼児から小学生、中学生、高校生やそれ以上とばらつきもあり、たとえば生きづらさを抱えている人も対象にしている場合は、さらに年齢を重ねている場合もある。そのため、子ども食堂特有の単一の「子ども」という存在がいるわけではない。

しかし、ひとり親家庭、とくに母子家庭の子どもたちが、経済的な困難さとともに語られ深刻な状況が報道されることもあり、子ども食堂にくる「子ども」のイメージが作られていった。和田は、マスコミ報道では「子どもの貧困」がセンセーショナルに取り上げられ「子ども食堂に行く子どもは貧困家庭の子どもである、というスティグマ化を助長している」(和田 2016 : 81) と指摘している。活動者からも子ども食堂が「貧困」という言葉を想起させることになってしまい活動がしづらいという声を聞く。これまで経済的状況とともに語られることのなかった「子ども」が、たとえば母子家庭という、ある特定の家族の中の「子ども」が経済的状況とともに語られることによって、「子ども」が再イメージ化されていった様子が見える。

しかし、たとえ再イメージ化された「子ども」への関心がきっかけだったとしても、活動の始まりが自分の身近な子どもの困難な状況からであったとしても、これまで経済状況と結びついて語られることがなく、また「理想」の象徴でもあった「子ども」のイメージがあった。そして、その「子ども」たちが置かれている困難な状況に多くの人が「何かできることを」と引き付けられたことには変わらない。そこで語られる、これまでとは異なるイメージの「子ども」の存在が可視化されたことで、これまで自分たちが想定していたような「総中流社会」が崩れていることも感じとったのかもしれない。そして、経済状況とともに語られた子どもの命を支える「食」の危機は、これまで想定してきた「子ども」のイメージの崩壊をさらに推し進めることに結びついていたのではないだろうか。

3.3 「家族の団らん」のイメージの崩壊

前項では、子ども食堂に引き付けられた理由のひとつとして「子ども」のイメージの崩壊を見てきた。そして「食」の危機は「子ども」のイメージの崩壊を推し進めたと捉えた。

「食」は家族で共にすることが多いが、家族で共に食べることと子ども食堂の広がりにはどのような関係があるのだろうか。Bさんは活動時に出会った子どもの発言に衝撃を受けている。

「私は子どもの貧困問題にすごく関心を持ったんだけど、結局、その「家族でご飯食べてるだ、Bんち、気持ちわり」って言われたのが、めちゃめちゃやっぱり、それはもうすごく、なんかショックだったんです。なので、やっぱりみんなでご飯食べるっておいしいよ、楽しいよ、っていう経験を、それは経験の貧困だよね、経済的な貧困っていうよりも。で、そういう貧困も、それが貧困ならば逆に、私たちがカバーできる、経済的貧困はできないけど。カバーできるところは私たちがやるしかない、やろう、やるしかないというか、それならできるじゃんっていうのがたぶん今広がっていて…」(Bさん)

関心の出発点は子どもの貧困問題だったが、「家族でご飯を食べること」が嫌悪感と結び付けられていることへの衝撃が語られている。家族でご飯を食べること自体がない子ども、つまり、ひとりでご飯を食べているかもしれないことや、家族で食事することに嫌悪感を抱くほど、家族が遠い存在であり家族の団らんがないことが想像される。また、Bさんにとっては「家族でご飯を食べる」ことは、当たり前で、欠かせない経験として捉えられていることがうかがえる。Bさんは、経済的な貧困だけでなく、家族、家庭での経験の貧困を感じ取ったのだろう。

この家族でご飯を食べることについてCさんは次のように語っている。

「生まれてから、数ヶ月は親と一緒にんだけど、気づけば保育園にいれられて、小学校の時も帰ってもひとり、中学になってひとり、高校になってひとり、大多数が結婚してもひとり、つまり、ずっとひとりなんだよね。個なんだよね。それはもうかわいそうというよりは、もう全体になってきちゃっている。(中略) 地域とのつながりが薄い、体験の貧困だとか、関係性の貧困はそこにくるんだよね。それは全員なんだよね。(筆者注：単身世帯や共働き世帯等が) 6割超えちゃうと誰かのための福祉じゃなくて、全員なんだよね。だから、食べることは全員の問題になる」(Cさん)

「食事っていうのは、人と人をつなげる役割があって、食卓を囲むことによって会話が出来てきて、人をつなぐ役割を持っていたものが、ないんだよ、今は。体験してないんだよ、6割が」(Cさん)

世帯数の変化や共働き家庭の増加から「孤食」や「個食」の状況にある人が増えてきてお

り、かつて共食の場であった家族が機能しておらず、共食の経験が乏しいことは特定の問題ではなくなっていることを指摘している。

品田知美は、共食をよしとする規範があることを指摘しながらも、なぜ家族が共食できないのかを分析している。20歳以上50歳未満で夫と子どものいる核家族世帯の女性を対象に、1988、2000、2012年の3時点の家族の共食状況から「子どものいる核家族では、全員がそろって共食する家族が1988年から2012年にかけて、ほぼ半減した。これは短期間に日本社会で家族生活にもたらされた非常に大きな変化であるとみなせる。社会属性が共食頻度への関連を強めていったことと考えあわせると、もはや人々のちょっとした意識改革や心がけで家族が食卓に全員そろうことのできるような社会環境は、失われたのだ」（品田2015：231-232）と言っている⁽⁸⁾。

ポスト構造主義的アプローチで食べ物、身体性、主観性の相互作用を分析したデボラ・ラプトンは、「食」と人間関係のあり方について「共に食べるものや食事のタイプと、その機会をもつ頻度は、情のかたよった結びつきを作る強力な要素であり、それゆえ、情動的な関係を築き、再生産することに直接関係する」（ラプトン1999 [1996]：61）と述べている。「食べることと情動の社会的な側面がとりわけ結びついているのは、家族内において」（ラプトン1999 [1996]：62）あり、食べ物に関わる営みは乳幼児期からはじまり、家族単位と結びついている。

しかし、品田が指摘するように、現在の日本社会では、個人的な心がけがあれば家族の共食は可能だという段階にないことが見えきた。「食べ物と常に結びけられる主要な情動のひとつが愛で、特に母の愛やロマンティックな愛、そして夫の幸せを願う妻らしい気遣い」（ラプトン1999 [1996]：62）を彷彿とさせる家族の団らんは、ままならなくなってしまった。そして、家族で共食することが嫌悪感につながる「子ども」の存在は、家族の団らんの経験がある、もしくはそのイメージをもつ人たちに衝撃を与えることになる。この家族の団らんのイメージの崩壊は、経験や体験、関係性の貧困として語られ、家庭や家族内で行われきたことを体験できる場が必要だという考えを生み出している。

このことは、多くの子ども食堂の食事が手作りであることにも関係しているだろう。もちろん、コスト面やフードバンクや地域の方のお米や野菜などの寄付もあり手作りをしなくてはならない状況もあるかもしれないが、たいていは活動者が調理した食事が提供されている。手間と時間をかけて作る食事には、「愛情がこもった料理」という家庭的な要素があるとも言える。「家族内における食べ物と食べることの役割を議論するとき、母性と女らしさをめぐる意味や社会規範の分析ははずせない」（ラプトン1999 [1996]：65）というように、「食」の共同体として思い浮かべられる最小単位である家族の「食」には、とくに近代家族以降は母性や女性性が結びついている。それは、1980年代に話題になった「孤食」の議論にも見えるものであった。

子どもがひとりでご飯を食べている実情が報道されたのは1982年のことであった。子ど

もたちが描いた食事の風景は「家族で食卓を囲む」ことから遠く、子どもだけで朝食と夕食を食べている事実は大きな衝撃を与えた（足立ほか 1983）。その後、家庭の食卓が変わったと言われ、1960年代以降に生まれた主婦の食事作りに対する態度への変化が注目された（岩村 2003）。

子どもがひとりで食事をしている状況が報道された後に寄せられた一般投書には、放送の事実にショックを受けたものが多く寄せられたようだ。そこには子どもがひとりでご飯を食べている姿に涙を禁じえなかったことや現代生活の悲しさもつづられている。主婦からは「便利であっても、これによって私たち母親の基本的な家族への愛情が欠けてゆく」や「今の若い女の母たる人は何を考えて子どもを産んだのでしょうか」（足立ほか 1983：202）という投書もあった。また、この放送で、家族で食事を食べるために生活改善や台所の改善を行ったことも紹介されている。これらの反応をうけて取材者たちは「放送のあと、まさに母は考えこみ、父は反省したのである」（足立ほか 1983：207）と父母の姿をまとめ「日常的であるからこそ、気を付けて努力すれば、その改善もまた可能性が高いものであることなどを、あらためて知らされるのである」（足立ほか 1983：214）としている。子どもの「食」の問題は指摘されたが、それらは母親に問題があり、また家族の努力で改善できる側面もあり、当時は母親や家族の問題と理解されたことがうかがえる。

子どもの「食」は子育ての一貫であるが、子育てへの不安やストレス等を抱えている母親に対して、2004年に「子ども・子育て応援プラン（新エンゼルプラン）」がスタートしたわけだが、当初から「子育て支援は親をダメにするのではないか？」（大日向 2005：vi-vii）という指摘があったという。子育て中の親、主に子育てを担っている母親を支援しないと子育て環境の改善につながらないという認識にたった支援であったわけだが、ここにも子どもを育てることは家族、とりわけ母親の問題であったことが現れていた。

ちなみに、大日向雅美によると、母親が子育ての負担感に苦悩する現象は1970年代の初め頃からだという。そして、前述したように、子どもがひとりでご飯を食べる姿が現れたのが1980年代初めである。1970年代初頭に育った子が、1980年代にひとりでご飯を食べることになり、そこから30年以上たち、当時の子どもたちが親となっている可能性がある。1970～1980年代に現れた子育てや子どもの「食」の問題を、母親や家族の中で応じていく事柄だとしてきたまま、時を経て出現したのが子ども食堂という見方もできる。そこでは、親ではなく「子ども」の支援を目的とし、子育てに欠かせない営みのひとつでもあり、家庭や家族、親族などの私的な関係の象徴でもあった「食」を、その外に出し、親や家族の問題に還元しない方向で向き合っていこうとしているように見える。

もちろん、子ども食堂の開催頻度が多くはなく、家族の代替となっているとは言えない。しかし、かつて家族という中で経験すると考えられていた営みの一部を体験する場、また補完する場としての子ども食堂の姿が見えてくる。また、家庭内で毎日子どもの「食」の世話を主に担っている人にとっては、誰かが手間ひまかけて作った手料理を子どもとともに

月に数回食べられるだけでも子育て支援になっているだろう⁽⁹⁾。

ここまで、活動実践者らのインタビューを通じて、子ども食堂がなぜ広がったのかについて見てきた。そこから考察したことは、これまで抱かれていた貧困とは無縁の「子ども」のイメージと「家族での団らん」のイメージの双方に崩壊が生じ、だからこそ、命を紡ぐ「食」の提供と、家族内で経験すると思われていた共に食事をすることに力点が置かれて活動が展開されていったことである。その活動の展開に「何かできることを」と子ども食堂活動にコミットする人が生まれ、活動が広がったとも言えるだろう。

4 子ども食堂とケア／セルフケア

子ども食堂を「居場所」としたとき、子ども食堂は「食を通じた居場所」となっている。その「食」に注目を見ると、誰にとっても生命の維持に欠かせず、また誰かの世話を行う場合には相手の「食」について考え、実際に食事援助を行い支えていくことから「食」はケア領域に入る営みと言える。ケアは、狭くは「看護」や「介護」、「世話」であるが、広義としては「配慮」「関心」「気遣い」と広範な意味をもつ概念と言われている(広井 1997)。ここではケアを広義の意味で捉え、ケアと子ども食堂の活動に見られる多世代で共に食事をとることや、活動の中で「食」を扱うこととの関係について考えてみたい。

4.1 「食」を通じた居場所で他者への配慮を経験する

子ども食堂の活動を「食」を切り口にして見た場合、「共生食堂」のように世代を超えて誰もが参加しやすい活動になることは想像にたやすい。子ども食堂の活動を紹介するガイドブックでは、「食」について次のように言っている。

「食」は人の命を紡ぐためだけでなく、生きる喜びを分かち合うことにもなる不思議な魅力があります。そして、共に食事をした人たちと、「おいしかったね」、「嬉しかったね」と言い合える関係づくりに発展する不思議な力を内包しています。」

(山崎 2017 : 8)

個人の命を支え、目の前にいる人も自分と同様にいま食べた「食」により、自分と同じように命を紡ぐ。その共通経験により、「食」の話題を入口に関係性が作られていく。藤原は、栄養摂取に「調理」と「共同体の構築」の付加機能であることが人間的な生活であるとし「お互いの粘膜や歯をむき出しにして、目の前にある食べものを、手やフォークや箸によって口の中に入れ、唾液をからませながら咀嚼し、喉を鳴らす。たとえ顔をあわせなくても、同じものを食べたり、同じ時間に食べたりすることが共同意識を高める。この一連の行為の共有が、人間関係を少しずつ深める」(藤原 2008 : 5)と言っている。子ども食堂に「食」があることは、欠食や孤食の子どもへの対応にもなっている部分もあるが、人が立

ち寄りやすく、また関わりやすい場にして、食堂にやってくる子どもと活動者や、地域の人たちとのつながりを作り上げていくためのツールにもなる。

この共同性のある「食」を通じ多世代に出会える機会には、どのような期待があるのだろうか。

「子どもたちのお手本になる大人がいないってことが一番問題だと思います。あの、たとえばね、顔を洗ったり、朝、おはようって言ったり、えーっと歯を磨いたり、食べたりするっていうその生活レベルっていうのも、やっぱりその子どもたちにとって、その、自分の周りにお手本になる大人がいるかないかで全然違うんですよね。」(Aさん)

「おじいさんとか、おばあさんに会ってないってことは、人が死んでいくってことが分からないよね。その人がお父さんになって、お母さんになって、あるいは30代、40代、50代になったら、親の面倒みるはずないよね、だって、その親も自分の親をみんなみてないんだよ、今の子どももそうだよね、全然、おじいちゃん、おばあちゃんをみてないよね、死ぬのをみてないよね、それは年々みないよね。だからそういうことだよ、家がなくなるんだよ。家っていう制度自体がなくなる」(Cさん)

世帯構成数が減り、また同世代や親子以外に会う機会が少ない場合、たとえば、子どもが少し年上の世代に会ったときには、憧れであったり、仕事の様子を知ることが出来たり、世界が広がることにつながる。このような期待も子ども食堂にはあると考えられるが、それ以外にも、子どもが多世代に出会うことには、暮らしの中で生活の仕方を教えてくれる人に出会えたり、人がどのように成長し、年を重ねていくのかを知ったりする機会として期待されているのではないだろうか。

以前、筆者も関わった「2015年度 千葉市のNPOにおける学生の参加状況に関する調査」で、活動の対象別（子ども、障がい者・障がい児、高齢者、その他）に学生のボランティアの参加状況をみたときに、高齢者を対象とした活動に学生の参加は見られなかった（七星2017）。限定的な調査ではあるが、高齢者を対象にした活動と学生の接点の乏しさが浮き彫りになった。

私たちは、対人支援の専門職でない限り、乳児や、障がい者、高齢者など、ある程度のケアが必要な人たちにどこで会おうのだろうか。たとえば、子育てを初めて行うとき、それは女性だから出来るわけではなく、それまでに子育てを見た、触れた経験がなければ、乳幼児と接することに躊躇してしまうだろう。それと同様に、人が年を重ねて老いていく時に、専門職が必要な領域もあるが、高齢者の生活のちょっとしたことを手助けするとい

うことに触れる機会がなければ、どのように接していけばいいか分からないのは当然とも言えるだろう。

しかし、子どもを起点として子どもたちが多世代に出会う場⁽¹⁰⁾として子ども食堂を捉えた時、ときには自分の一歩先をゆくロールモデルとなり、ときには子育ての様子を垣間見たり、また自分よりかなり先行く人と出会い、人が年を重ねていく姿に出会う場にもなる。そのような人に接している人を見ることで、自分とは異なる状況にある他者に対してどのように接していけばいいかを学ぶ。やがて、これまで自分に手間をかけてくれた人が、年をとり手助けが必要になる。と同時に自分自身も成長し、出来ることが増えていき手助けする側になり、配慮していけるようになっていく。多世代が集うことは、そのような循環を経験できる場の創設になりうるだろう。

4.2 「食」を通じて自分の体をいたわる—セルフケアとの接続

ここまでは、多世代が集うことで他者への配慮の機会のある場として子ども食堂について考えてきたが、Aさんは、いずれは学校教育内での食事を通じた教育への構想を抱きながら、自分の体への配慮の大切さについて語っている。

「今日の疲れをとるためにどうするか、とか、いま自分の力がこうだからこういうのを食べたほうがいいなと考えて料理を作るとかね、そういうことをやっていくのが私は食育だと考えているので（中略）病気の人に対してはカロリー計算は大事だけど、でも普通の人は、それよりはやっぱり、腹八分目って言葉もあるし、体にいいこととかいっぱいあるじゃないですか。そういうのを子どもに伝えて、生きていける、そういう教育をすることが大事だと思っているので、やっぱり食ってというのはそういう、なんていうのかな、生きていくほんとに原点をちゃんと教えてくれるものだから、あの、そういうものを大事にしていくってのはすごく大事なことかなって思うんですね」（Aさん）

「やっぱり自分の体も考え、相手のことも大事にし、みたいな、そういうなんていうんだろう、考えるということですよ、思いを馳せるっていうかさ。相手もそうだし、食を通じて、これをね、この野菜を作ってる農家さんでどういう人だろうとか（中略）作ってくれた人がどういう思いで作ってくれたのかとか、そういう、思いを馳せるっていうことを食を通じて訓練していけば、そうすれば、自分がたとえば「ばかやろ」って言った相手が実はもしかしてどういう思いをしてたんだろうなっていう思いをその人に馳せることができるっていうんですかね、それが大事だと思うんです。」（Aさん）

人間が食べることと、生きることはつながっている。健康について考えるならば、ただ食べ物を食べて空腹を満たせばいいということではすまない。どのような食事が健康にいいかはさまざまな意見があるだろうが、食事を通して自分の体に気を遣うことはセルフケアの第一歩と言えるだろう。子ども食堂の開催頻度は少ないとはいえ、家族以外の人が、子ども食堂に来る子どもたちに思いを馳せて、手間ひまかけて料理をつくる。やがて、その料理は食べた人の身体になる。そのように作られていく自身の身体に気を遣ってみる。なんとなく食べていた食材がどのように出来たのかについて想像してみる。「食」を通じて、自分の身体をつくる食べものとのつながりを考える。このような想像力がやがて他者への配慮につながることを期待されている。

子ども食堂は「居場所」と捉えられており、湯浅は居場所の核は「時間」であり、「自分に関わり、自分を見て、自分に声をかけて、自分の話を聞いてくれる時間」（湯浅 2017）が重要だと言っている。居場所には自分の存在が承認される側面がある。広井良典が「承認」というテーマは、「ケア」ということと深く結びついていると思われる」（広井 2013:20）と言っているように、子ども食堂は、その場自体がもともと「ケア」と関係があるとも言える。さらに、これまで「食」の中心的な場でもあった家庭の外の「居場所」に「食」があることで、多世代が集いやすくなり、人が生まれ、成長し、老いていく過程にふれ、「食」を通してセルフケアや他者への配慮の経験ができる可能性もある。それは、広義の「ケア」を経験する場として位置付けられるのではないだろうか。

このように見ていくと「食」やそれにまつわるケアは、生活の経験の中にあるものとも言える。昨今、生きる力を育むために子どもに調理を教える活動がある。社会福祉法人が連携した取り組み「おおたスマイルプロジェクト」は、母子生活支援施設である大洋社を中心に、「生きる力を身につける」ことを目的に立ち上がった。そこでは「学ぶ」「食べる」「動く」「体験」するプログラムを通して、ひとり親の子どもや若者支援、ひとり親支援をしている。プログラムのひとつである「食べる」では「食事は生活の基本」であり、役割分担をしながら調理してみんなで会食をしている（斉藤 2017）。

かつて「自立」と聞くと経済的な自立が思い浮かべられることもあったが、このプロジェクトでは、経済的な自立だけでなく、生活を作る力を身につける「自立」を目指しているように見える。不安定な雇用や先行きの見えない経済・社会状況において、経済的な自立ばかりでなく、いまある資金の中で健康的な生活をいかに組み立てていくのか、その中で自身の身体に配慮しながら料理を作る力を持つことの重要性が増しているように見える。このような調理を教える活動にしても、子ども食堂にしても、かつては、暮らしの中で行われてきたとされる生活経験やケア経験が現在ままならなくなってしまい、それらの経験をどこで行っていくのかということの模索の現れとしての取り組みなのではないだろうか。

5 おわりに

私たちは、子ども食堂に魅かれた。「食」の共同体の最小単位である家族がままならなくなり、地域に「食」を通じた居場所を作ること望んでいる。

ここまで子ども食堂実践者らのインタビューを手掛かりに子ども食堂がなぜここまで広がっていったのかについて見てきた。もちろん、子ども食堂の実践者たちがすべて同様な考えを持って活動しているわけでないが、今回見えてきたことは「子ども」や「家族の団らん」のイメージの崩壊と、家族、家庭内の経験のひとつである「食」を通じた生活やケア文化の継承の可能性であった。また、子どもの生活経験が不足していることが注目されており、子ども食堂は家庭や家族内で行われていた経験をする場として捉えられていることが見えてきた。これらのことから、子ども食堂は、「子どもの貧困」への関心が現代社会を認識するための契機となり、生を支える営み自体が崩れていることを感じ取ったことで、その活動の広がりを推し進めたのではないだろうか。

子ども食堂は、先行研究でも言われてきた市民活動や地域づくりとしての側面もあるが、人が安心して生を育み、紡ぎ、看取することを私たちが今後どのようにしていくのかという問題ともつながっており、家族論、ケア論にもアクセスする問題でもある。先人たちの研究に依拠すれば、1970年代までに「子ども」と経済状況の結びつきは見えなくなり、子どもたちの孤食は女性や家庭の問題とされてきた1980年代を経て、現在は、「子ども」という希望と理想に貧困が結びつき、前提としていた家族像や社会像が崩れ始めた。しかし、それを40年前のように、家族に還元するのではなく、「食」という誰にでも通じる営みを切り口に特定の人だけでない問題にしようとしている。

「子ども支援なんてほんと、いまやってることなんて、全くこう、急に劇的に子どもの暮らしが変わることなんて全くないかもしれないけれど、10年後、20年後にその子がやっぱりその原体験があることによって自立して、あったかい家庭をつくって、ってなったときに成果ってみえるもんなんです…。」(Bさん)

子どもの支援の成果を問うことは難しいが、家庭で行ってきた活動をそれ以外の場所で支援することは、Bさんの言うように、いつか、その子どもたちが自分の家庭を持ったときに役立つようにという再家族化への願いがうかがえる。

また「地域の住民が始めた子ども食堂は、大人も懐かしさや温かさを感じる居場所になっています」(栗林 2016:4) という「懐かしさや温かさ」とはどういうものだろうか。2000年代に入ってから昭和30~40年代ブームが続いているという(仁平 2010)。『ALWAYS 三丁目夕日』とえば分かるだろうか。「夕日」は、高度経済成長で壊されたとされる「人と人のつながり、心の豊かさ」への喪失を表しており、それと重なり「高度経済成長」「経済発展」という物語そのものであり、それと連動していた諸個人の「夢や希望」ではない

だろか」(仁平 2010:81) と仁平典宏は指摘する。その時代を支えていた性別役割分業を前提にした「家族福祉」や「企業福祉」が崩れ、かつての経済成長を感じることの難しい現代に、それでもなお私たちが「夕日」に憧れるのであれば、そこにある何が私たちがよりよい生を過ごすために必要であり、それをどう配置していくのかを見ていく必要があるだろう。さらに、かつてケアを支えてきた家族が機能しなくなり、生を支える営みがままならない現代において、ケア領域の支援は家族機能やケアにとってどのような位置づけになるのだろうか。今後の課題としたい。

注

(1) 中塚久美子・河合真美江・丑田滋, 2016年7月2日 朝日新聞 東京本社発行「子ども食堂 全国に300カ所超す 貧困・孤食 広がる地域の支援」

(2) 湯浅は、現在の各地の広がりの実情から考えると「500を超えているのは確実」で「1000カ所を超えていてもおかしくない」(湯浅 2018) と推測している。

(3) 湯浅は「一人暮らしの高齢者の食事会に子どもが来られるようになれば、それも「こども食堂」だ」(湯浅 2016:5) と言っている。

(4) 吉田はこのほか地域住民に食事提供をしてきた活動としてセツルメントの取り組みをあげ、日本で1972年から始まった横須賀基督教社会館での独居の住民や寝たきりの高齢者への給食・配食サービスを紹介している(吉田 2016)。この高齢者への食事支援活動は、1980年代に、子育て中の母親たちが地域で孤立した高齢者に地域で出会い、このような問題を家族で解決するのではなく、地域で解決していこうという取り組みとしても展開されていった(老人給食協会〈ふきのとう〉1989)。現在は高齢者にむけた配食事業を展開しているNPO法人あかねグループは、1980年の活動当初は働く女性のためにディナー配達をしており「嫁でも母でもなく、一人の女性として社会と関わりたい」(清水 2016:124) という思いが活動の原点であったという。当時は、女性が社会進出することが難しい時代にも重なっており、活動者である女性たち自身も弱い立場にあったとも言える。高齢者の食事支援活動は、セツルメントとしての取り組みという方向だけでなく、活動者である女性が抱えてきた問題も含めた活動展開の方向性があったとも考えられる。このような活動の展開と、現在の子ども食堂活動の展開の比較や関係性等は別稿で考えを深めていきたい。

(5) ちなみに、初めて「子ども食堂サミット」という名前でシンポジウムが開かれたのは、2015年1月12日で、NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークが主催で開催された。

(6) 2018年2月から子ども食堂の安全性の向上に向けて、保険代をクラウドファンディングで集める「こども食堂安心・安全プロジェクト」が立ち上がり、活動を定着させるための働きかけが始まっている(湯浅 2018)。

(7) 現在は7人に1人と若干改善している。

⁽⁸⁾ 品田は「妻が無職であることは、「家族が食卓にそろって生活」の成就を意味せず、逆説的にフルタイム職についていることが、共食の機会を多くしている。もしも「女性が社会進出をしたから家族の団らんが失われて食卓を囲まなくなったのではないか」というイメージが流布しているとすれば、それは間違っている」（品田 2015：232）と指摘している。

⁽⁹⁾ 本稿では子ども食堂の子育て支援の側面については取り上げないが、前述した子ども食堂活動ガイドブックでも子ども食堂にある週は気が楽になることがという母親のコメントが紹介されている。また、Aさんのインタビューの中でも子育て中の母親の似たようなエピソードが語られており、子ども食堂が子育て支援につながっていることがわかる。

⁽¹⁰⁾ 本稿では制度等には踏み込まないが、介護保険改定に伴い一般介護予防事業における通いの場には障害者や子どもなども加わることができる（厚生労働省 HP 厚生労働省老健局振興課）。また「我が事。丸ごと」という地域共生社会構築にむけた動きが始まっている。今後、このような動きと子ども食堂との関係についても見ていきたい。

参考文献

- 相澤真一，2016，「子どもと貧困の戦後史」相澤真一・土屋敦・小山裕・開田奈穂美・元森絵里子『子どもと貧困の戦後史』青弓社，9-28.
- 阿比留久美，2017，「子どもの文化を生み出す「居場所」（第5回）子ども食堂：地域の子ども・大人が食卓を囲む場づくり」『子どものしあわせ』（798）：24-29.
- 足立己幸・NHK「おはよう広場」班，1983，『なぜひとりで食べるの—食生活が子どもを変える』日本放送出版会
- 阿部彩，2008，『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波新書.
- 岩村暢子，2003，『変わる家族 変わる食卓 真実に破壊されるマーケティング常識』勁草書房.
- NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク編著，2017，『子ども食堂をつくろう！人がつながる地域の居場所づくり』明石書店.
- 大日向雅美，2005，『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』岩波書店.
- 栗林知絵子，2017，「はじめに」NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク編著『子ども食堂をつくろう！人がつながる地域の居場所づくり』明石書店，3-5.
- 斎藤弘美，2017，「おおたスマイルプロジェクト—東京都大田区の社会福祉法人連携の取り組み」『月刊福祉』100（10）：38-41.
- 品田知美，2015，「なぜ家族は共食できなくなったのか」品田知美・野田潤・畠山洋輔『平成の家族と食』晶文社，215-236.
- 清水福子，2016，「暮らしの中の小さな気づきを大切に、支え合う地域づくりを」NPO 法人

- あかねグループ」スマートエイジングネット編『「女活」の教科書〔自治体編〕』
 マスターリンク, 124-128.
- 中塚久美子・河合真美江・丑田滋, 2016, 「子ども食堂 全国に300カ所超す 貧困・孤食 広がる地域の支援」『朝日新聞縮刷版 2016 (7)』(1141) 朝日新聞社, 61-62.
- 七星純子, 2017, 「「2015年度 千葉市のNPOにおける学生の参加状況に関する調査」にみる活動対象者別の学生の参加状況について」清水洋行編『ローカルのサードセクターにおける学生の参加・就労に関する調査研究 (2016年度)』千葉大学大学院人文社会科学研究所 研究プロジェクト報告書 (322) :25-39.
- 仁平典宏, 2010, 「三丁目の逆行／四丁目の夕闇—性別役割分業家族の布置と貧困層」橋本健二編著『家族と格差の戦後史 一九六〇年代日本のリアリティ』青弓社, 79-110.
- 広井良典, 1997, 『ケアを問いなおす—<深層の時間>と高齢化社会』筑摩書房.
- , 2013, 「いま「ケア」を考えることの意味」『講座ケア 新たな人間—社会像に向けて 第1巻 ケアとは何だろう—領域の壁を越えて—』ミネルヴァ書房, 1-30.
- 「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会編, 2016, 『「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー公式パンフレット 第1版』.
- 「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー実行委員会テキストプロジェクト, 2017, 『広がれ、こども食堂の輪！活動ガイドブック』.
- 藤原辰史, 2008, 「食の共同体」池上甲一・岩崎正弥・原山浩介・藤原辰史『食の共同体 動員から連帯へ』ナカニシ出版, 3-13.
- 室田信一, 2016, 「子どもの孤独感を埋めるみんなの居場所「子ども食堂」の広がり」『児童心理』70 (19) : 89-93.
- , 2017, 「子ども食堂の現状とこれからの可能性」『月刊福祉』100 (11) : 26-31.
- 元森絵里子, 2009, 『「子ども」語りの社会学』勁草書房.
- , 2016, 「大人と子どもが語る「貧困」と「子ども」—どのようにして経済問題が忘れられていったか」相澤真一・土屋敦・小山裕・開田奈穂美・元森絵里子『子どもと貧困の戦後史』青弓社, 133-162.
- 山崎美喜子, 2017, 「食を通じて、つながりあって、生きる喜びを」「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー実行委員会テキストプロジェクト『広がれ、こども食堂の輪！活動ガイドブック』, 8-9.
- 湯浅誠, 2016a, 「名づけ親が言う「こども食堂」は「こどもの食堂」ではない」「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会編『「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー公式パンフレット 第1版』.
- 吉田祐一郎, 2016, 「子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた—考察—地域における子どもを主体とした居場所づくりに向けて—」『四天王寺大学紀要』(62) : 355-378.

Lupton, Deborah, 1996, Food, the Body and the Self, Sage Publication : London, Thousand Oaks and New Delhi. (=1999, 無藤隆・佐藤恵理子訳『食べることの社会学 食・身体・自己』新曜社.)

老人給食協会〈ふきのとう〉編, 1989, 『老人と生きる食事づくり』晶文社.

和田悠, 2016, 「子ども食堂づくり運動の現状と課題」『季刊ピープルズ・プラン』(74) : 79-82.

<Web 資料>

NPO 法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク facebook 2014年12月10日投稿ページ

<https://www.facebook.com/toshimakodomowakuwaku/photos/a.340623456065955.1073741828.330920300369604/606419122819719/?type=1> : 閲覧日 2018年2月

13日

厚生労働省老健局振興課「介護予防・日常生活支援総合事業の基本的な考え方」

<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000192996.pdf> : 閲覧日 2018年2月25日

こども食堂ネットワークホームページ

<http://kodomoshokudou-network.com/start.html> : 閲覧日 2018年3月5日

湯浅誠, 2016b, 「「こども食堂」の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く」『yahoo! ニュース』2016.10.16掲載記事.

——, 2017, 「子どもの貧困 「居場所」とは何か? 居場所が提供するもの、そして問うもの」『yahoo! ニュース』2017.3.28掲載記事.

<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20170328-00069124/> : 閲覧日 2018年2

月13日

——, 2018, 「こども食堂の安心・安全を高めるために 保険プロジェクトのことを全国のこども食堂に伝えたい」『yahoo! ニュース』2018.2.2掲載記事.

<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20180202-00081141/> : 閲覧日 2018

年2月13日